

普通の国語授業

【導入】

T: 今日から『大造じいさんとガン』を読みます。教科書の〇〇ページを開きましょう。そして順番に音読をしましょう。

C: はい。(『大造じいさんとガン』の音読)

T: それではどんなことを考えましたか？ 感想を書いてみましょう。

C: 大造じいさんはなんで銃をおろしたのかな。

C: 残雪はなんでそんなに頭がいいんだろう。

***読む必然性がない。**

【展開】

T: 今日教科書の〇ページから〇ページを読んで多くの人が疑問に思っていた、「なぜ大造じいさんが銃をおろしたのか」について話し合います。

C: 残雪が自分の育てたおとりのガンを助けてくれたからだと思います。

C: 大造じいさんは元気な残雪と正々堂々とまた勝負をしたいからだと思います。

C: 大造じいさんは命の大切さを知ったからだだと思います。

C: でも大造じいさんは、その後また残雪を殺そうとしているよ。

C: そこは漁師だから仕方がないんじゃないかな。

T: いろいろ意見が出ましたが、教科書に書かれている通り、ただの鳥に対してのような気がしなかったからですね。これをまとめましょう。

***先生が正しい解釈を決め、それを全員にまとめる。**

【終末】

T: 『大造じいさんとガン』をしっかりと読んできましたね。ではここから本の帯を作りましょう。今までしっかりと読み込んできたので、あまり時間とれないので1時間でがんばって作りましょう。

C: 先生どうやって本の帯を作るんですか。本の帯を作るつもりで読んでなかったから分からないな。

C: 今までで分かったことをもとに本の帯を作ればいいんだから、ノートを見直そう。

***しっかりと読んできているので、本の帯を作る必然性がない。また生活における読書につながらない。**

これから目指したい国語授業

【導入】

T: みなさん本の帯で見たことがありますか？ 先生は『大造じいさんとガン』にいい表現がたくさんあったので、思わず作ってしまいました。

C: おもしろそう！ 僕たちも『大造じいさんとガン』を読んで、本の帯を作ってみたいです。

C: でもどうやって読めばいいかわからないよ。

T:



じゃあ、ぜひ作りましょう。本の帯を作るには、いい表現に注目して読む必要があります。人物像に注目して読めば、本の帯が作れますよ。

【展開】

T: 今日は何をしますか。

C: 今日は人物像に注目して本の帯を書くんだよね。

C: 大造じいさんは心優しい勝負師だと思います。生活に必要なのに、残雪を助けたからです。

C: 執念深いプロの猟師だと思います。なぜかというところからタニシ五俵も集めて残雪を捕まえようとしたからです。

C: 確かに！ タニシ五俵はすごい執念だね。それは気づかなかったなあ。私だったらそこまでがんばろうとは思わないな。

C: 私は優しいというのはちょっと違うと思うな。職業とはいえ、最終的には残雪を殺そうとしているんだから。命の大切さは知っているけれど、職業だから仕方なく殺す、その殺すときに奪った命に失礼なやり方はしたくないだけなんじゃないかな。

T: いろいろ話し合って自分なりの大造じいさんの人物像が深まりましたか？ それでは今日学習した人物像をもとに本の帯に書く文を書いてみましょう。

***それぞれの解釈を認め、本の帯につなげる。**

C: 「執念深い猟師大造じいさん、命にどう向き合うか」

【終末】

T: 今まで作ってきた本の帯を見直して、自分がいざばおすすりめしたい人物像をもとに自分の本の帯を作りましょう。

C: 先生、いい帯ができました。これを友達に紹介したいです。

T:



みんな『大造じいさんとガン』の素敵な本の帯ができましたね。みんなで交流しましょう。これから人物像に注目するおもしろく本を読めますよ。普段の読書でいい本があったら本の帯を書いて教えてください。

単元の導入の工夫

【言語活動を「読む」きっかけに】

今回の学習指導要領の改訂では、知識・技能や思考力・判断力・表現力等だけでなく、学びに向かう力・人間性等も育てることが求められています。教師が読む必然性をもたせることなく「さあ読みましょう。」と投げかけても、自ら本を読もうとする学びに向かう力を育てることは困難です。

文学的文章の学習の最大の目標は、自ら本を読もうとする、読書をする姿勢を育てることだと考えています。自ら本を読もうとする学びに向かう力を育てるには、児童が最初にページを開くまでにどうするかが重要です。本の帯を作ろうという言語活動は本を読むきっかけになりますし、本の帯を作ることで、今後児童は、本の帯に注目して本を選ぶようになるでしょう。重要なことは、児童たちに『大造じいさんとガン』を読みたいと思わせることです。そのためにはいくつかの工夫が必要です。

【子どもに「読みたい」と思わせる工夫】

一つ目は教師自らが言語活動をしてみせ、完成形を示すことです。児童に教師の手作りの完成形を見せると、児童は“ぜひ自分でも作ってみたい。”“そのために本を読みたい。”と思うはずです。

二つ目は言語活動と教材がしっかり合っているということです。『大造じいさんとガン』は優れた表現があり、本の帯を作ることに適しています。本の帯で『大造じいさんとガン』のよさを引き出すことで、児童はさらに『大造じいさんとガン』を読みたいと思うでしょう。



単元展開の工夫

思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等を育成するには、教師の問いから考え、教師の隠している答えを見つけるという授業では困難です。大切なことは二つあります。

【子どもの主体的な学習に】

一つ目は児童自身がゴールに向かっていくという主体的な学習になっているということです。本の帯を書くという言語活動に向けて、今日何をすべきかを児童自身が考え、児童自身に言わせることが重要です。そのためには学習計画をしっかりと立てて、単元の終末に向けて毎時間何をするのか、児童自身が理解していることが重要です。

【子どもが学び合う学習に】

二つ目は児童の学び合いを通して考えを深め合うということです。教師のもっている答えと合っているかどうかではなく、児童自身が自分の考えと友達の考えを交流しながら自分の考えを深めていくことが重要です。友達の意見を聞いて変わってもいいし、変わらなくても理由が深まればいいと考えます。大切なのは自分自身の解釈が本文を根拠にきちんとと言えることです。



実場における活用

【言語活動を通して解釈を深める】

国語科の授業で言語活動を導入しようとすると、教師主体の読み取りの後に言語活動を行うという授業になりがちです。またそのような授業では時間がなくなってしまい、結局言語活動はしないということも多いのではないでしょう。

しかしそれでは児童の主体的な学習にならず、学びに向かう力・人間性等を育成することは困難です。解釈が深まってから本の帯を作るのではなく、本の帯を作ろうと思うからこそ、解釈が深まるし、学びに向かう力・人間性等も育成できると考えます。

【学校での学びを日常生活につなげる】

それから授業で学んだことを授業内で終わらせるのではなく、日常生活と結び付けていくことが重要です。

児童は本の帯を作るという言語活動を通して、登場人物の人物像を読む方法を学びました。今後児童は文学的文章を読む際に、登場人物の人物像を捉えることで登場人物のもっているものの見方・考え方を知ることができるようになります。その結果、児童は登場人物と対話をするという文学的文章の楽しみ方を知り、ますます読書が好きになることでしょう。



授業改善イメージ② (書く/3年 報告文を書く)

普通の国語授業

【導入】

T: これからスーパーマーケットで調べたことをまとめて報告文を書きましょう。大事なことは以下の通りです。

- 見出しをつける。
- 図表を入れる。
- いちばん伝えたいことに最も広いスペースをとる。これらに気をつけて報告文を書きましょう。

C: はい。がんばって報告文を書くぞ。

***報告文を書く目的、伝える相手が明確でない。どう書くかを教師が与えている。**

【展開】

C: よし、報告文を書くぞ。先生が教えてくれたポイントに気をつけながら書こう。

C: 書いているうちにもっと知りたくなってきちゃった。学校図書館に調べに行ってもいいですか？

T: 今日は書く時間なので、もう調べる時間ではありません。がんばって思い出して書きましょう。

C: 先生、友達と協力して書いてもいいですか？

T: 自分で考えることが大切です。自分の力で書くようにしましょうね。

C: 友達に協力してもらおうと、自分の文章ではなくってしまうので、誰にも相談しないで書こう。

***学習過程は一方向なものではなく、行ったり来たりするものなのに、教師の都合で制限している。また書くことは、本来協働的な活動なのに、一人の活動にしてしまっている。子ども自身もそう思っている場合が多いので、協働で書くことのよさを実感させたい。**

【終末】

T: ポイント通り書けましたか。友達と交流してみましょう。

C: 見出しがなかったから今度は見出しをつけたい。友達が教えてくれた。

C: 図表がうまく入れられなかったから入れられるようにしよう。

T: それでは、交流が終わったら先生に提出しましょう。それで成績をつけます。

***交流の観点が、教師が示した通りに書いているかどうかという観点になっており、思考力・判断力・表現力等の育成につながっていない。また、読み手がどう受け取ったかが分からないので、達成感も得られないし、次の改善点も分からない。**

これから目指したい国語授業

【導入】

T: これからスーパーマーケットで調べたことをおうちのの人に伝える報告文を書きましょう。おうちの人は忙しいし、スーパーマーケットのことはよく知っているの、どう書けばいいと思いますか？

C: 中に何が書いてあるかすぐに分かるように見出しを入れればいいと思います。

C: おうちの人が気にするお得情報にいちばんスペースを使ったほうがいいと思います。

***報告文を書く目的、伝える相手が明確になっている。どう書くかを子ども自身が相手や目的から考えている。**

【展開】

C: よし、報告文を書くぞ。自分たちで見つけたポイントに気をつけながら書こう。

C: 書いているうちにもっと知りたくなってきちゃった。学校図書館に調べに行ってもいいですか？

T: いいですよ。そのかわり終わる時間は一緒なので、時間配分に気をつけましょう。

C: 先生、友達と協力して書いてもいいですか？

T: いいですよ。読み手からどう見えるか、アドバイスをもらいながら書きましょう。

C: みんなで協力して、いい文章になるようにアドバイスをし合おう。

C: 友達のおかげで、気づかなかった視点に気づけたよ。協力して書いてよかったな。

***行ったり来たりする学習過程を許し、子どもの自然な思考の流れになるようにしている。また、協働的な書くことの活動になっていて、自分とは違う見方を知り、自分の考えを広げたり、深めたりしている。**

【終末】

T:  完成した新聞を見て、おうちの人は何と言ってくれましたか？

C: おうちの人がお得情報がたくさん書いてあっていいと喜んでくれました。

C: お得商品がどこにあるのか伝わりにくかったの、図を描けばよかったと思いました。

T: それでは、単元で学んだことを振り返りとして書きましょう。

***交流の観点が、読み手からの反応に基づいたものになっており、自分の考えたことと読み手の反応を結び付けて振り返ることができている。そのことにより達成感や、次への改善点を具体的に持つことができ、次への学びに意欲を高めている。**

単元の導入の工夫

【今、求められる力を身に付けるために】

今回の学習指導要領改訂では「話す・聞く」、「書く」、「読む」の指導事項は「知識及び技能」ではなく、「思考力・判断力・表現力等」の中に含まれています。ここに含まれている理由は、世の中の変化が激しくなったことが原因です。

ひと昔前までは世の中の変化がゆっくりだったので、今正しいとされる伝え方を知っていれば、その児童が大きくなったときにそれを使えば困ることはありませんでした。しかし変化が激しくなり、グローバル化が進んできている現在、それが通用しなくなってしまいました。

相手や目的に応じてどう伝えるべきか、児童自身が伝え方をしっかり考え、適切な伝え方を選んだり、作り出したりすることが重要なのです。教師が正しいとされる伝え方を教えて理解させる授業では、相手や目的に応じた伝え方を考える力を育成するのは困難です。

【子どもたちに完成イメージを】

特に書く活動は児童が苦手な場合が多くあります。児童が書きたいという題材を、伝えたい相手に書くという言語活動を設定し、それが魅力的であると児童に単元の最初にしっかりと伝える必要があります。

そのための有効な方法は教師が実際に文章を書いていることでしょう。実際に文章を書くことでどのような力が必要なのかが分かることはもちろんのこと、完成イメージを児童に見せることができます。そのことで児童に、これなら書けそう、書いて伝わらなそうという気持ちを引き起こすことができ、単元をスムーズに始めることができます。



単元展開の工夫

【学習過程は自由に往復させて】

どうしても教師は全員足並みをそろえて授業をしたものです。なぜならそれは教師にとって楽だからです。しかし大人が文章を書くという活動を考えればすぐに分かるように、書いている最中に取材に戻りたくなったり、構成を考え直したくなったりすることはよくあります。児童にとっても学習過程を自由に往復させて書く方が書きやすいはずで、ただ授業時間は無限ではないので使える時間を児童に示し、その時間内で終わるよう児童に指導しながらも、その時間内であれば自由に学習過程を往復できるようにさせるとよいでしょう。

【友達との交流で、よりよい文章に】

また書く活動は個人の活動で、友達と助け合うと本人の作品ではなくてという誤解が教師や児童にもあるようです。本来文章とは、書いたあと様々な人に読んでもらって推敲し完成するものです。書いている最中にも友達と自由に交流させ、いろいろな友達の意見を取り入れながら書いていくことのよさをしっかりと実感させたいものです。



実場における活用

【読み手を明確にして書くことが大切】

書くという活動は相手がいる、読んでくれるから成立する活動です。確かに日記など自分に向けて書くという活動がないわけではありませんが、基本的には相手に読んでもらうことが前提となっています。

書いた文章は相手に読んでもらうことで、自分の文章のよいところを読者から教わることができます。そのことによって子どもはまた書きたいと、学びに向かう力を伸ばすことができるでしょう。

【よさを褒め合い、よさに気づく】

今までの学習指導要領では交流でアドバイスし合うことと定められていましたが、今回はよいところを見つけることと明記されました。書き終わった後にアドバイスをもらっても、次に生かせるのがいつか分からないし、最後に褒めてもらった方が児童も、また書きたいという気持ちになるのではないのでしょうか。

また自分とは考え方の違う他者に読んでもらうということは自分が気づかなかったよさに気づくことになり、考え方が広がります。クラス内の友達だけではなく、いろいろな他者に読んでもらうとよいでしょう。